

# 私とクラゲと感激と

安 田 徹

学窓を去って2年間勤務した青森県水試に別れを告げ、本県水産試験場へ転出を決意したのは、昭和39年4月半ばの頃であった。未知の地に向かう不安と新しい仕事に対する希望とが交錯する複雑な気持ちで特急白鳥号に乗ったのが昨日のように思える。敦賀に到着後、すぐ松島の旧試験場へ案内された時、美しい海岸と松林が印象的で内地の人になったとの感を強くした。私がここへ来ることを決意したのは、一つには当時の場長の温厚な人柄にひかれたからであり、この人の下でなら以前にも増して充実した興味ある仕事が楽しく出来るかもしれないと言う一種の甘えもあった。そんな私の期待は、一年後の場長退職でふっ飛んでしまった。後任場長は厳格で研究者としてのモラルをとりわけ強く要求される方であった。今、思えば私を鍛えて下さったのだと感謝したこともあるが、当時はそのように理解出来なかった。未知のしかも数多い仕事の連続、私自身道産ン子のスローモーとくるから歯車が噛みあわない。更に悪いことに、与えられた仕事の内容は、私の不得意な浮遊生物・海藻・付着生物・底棲生物調査がその主なものであった。つまり、研究したいというテーマを選択することなどはとても許されなかつたのである。毎日のように失敗や勉強不足を歯に衣着せぬ直截的な表現で指摘されるうちに、次第に自信喪失となり、大変な職場へ来てしまったものだと後悔した。そしてこのような日々の繰り返しでは、将来自分は何一つ満足な仕事も出来ずに一生を終ってしまうのではないかという不安が募るばかりであった。水試の仕事の主流をなす産業的価値の高い生物の一分野のみに取り組んでいる同じ世代の研究者達を見るにつけ、一層自分が惨めに思えた。

## 水母との出会い

41年の秋、突然敦賀湾の水母の生態を明らかにせよ、という命令を受け困惑した。当時の私には、水母といえば入試問題に発生環の奇妙な名がて、その一部を記憶していた以外に何の知識もなかったからである。その乏しい知識でも一般のプランクトンなら小型ネットを曳けば数多くの試材を簡単に収集できようが、水母となれば余程大型の採集網が必要で、その労力が大変なことは容易に推察できた。水母に詳しいという専門家に研究方法を尋ねても、野外調査となると教示して下さる先輩は職場にはもちろん他県にも全く見当らなかった。水母のフィールド調査は、予想どおり極めて困難な仕事であった。いくら採集を試みても一個体も網に入らなかったり、逆に大人3~4人がかりでも、到底引き揚げられぬ程の数十kgに及ぶ水母が一時に入網したりする。しかもその数を数えているうちに、全身水母の粘液にまみれ、水母特有の刺胞毒に手足の皮膚を侵され、腫れ上がらせたことも兩三度ではなかった。ただ懸命に調査を続けていくうちに、この奇妙な動物の出現場所や時期・浮上・沈降等の生態的事項が可成り規則だっていることが、おぼろげながら判明してきたのであった。

## 定説に挑戦

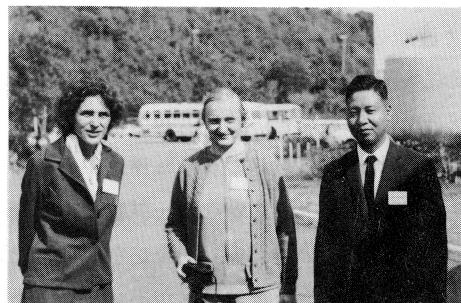
毎夜子供らの寝静まったあと、手元にある内外の文献を読み漁っていくと、この分野の研究例が殆んど見当らず、又從来ほぼ定説化されている水母の生活史が敦賀湾の場合には、どうも当てはまらないことに気付いたのである。そこで、今迄に判明した事実を専門の学術雑誌に紹介しようと考えた。しかし、学術論文など書き慣れぬうえに、山積みする昼間の調査では書くゆとりはない。結局帰宅後と土・日曜の限られた時間を當てるより仕方がなかった。上司の命令ではあっても、水産業上むしろ害敵生物と考えられる水母の研究には、あのような動物を調べて、一体何の役に立つのだという場内的一部から非難が絶えなかつたのだから当然であった。それはともかく、苦心の末ようやく一編の論文にまとめ、専門誌に掲載された時、国内・海外から多數の手紙が届き、予想もしない反響には驚かされた。そして仕事の内容を広く報告することは、他の研究に従事する人達にも役立つことを初めて知ると共に、失いかけた自信らしきものが甦り、その後は夢中で資料を整理し投稿を続けた。水母を含む約30編の論文が出来上った49年秋、京大で開催される第2回腔腸動物国際会議への発表を誘われ、自分の勉強にもなると考え受諾した。

12ヶ国から70名が参加し、40名の専門家の研究成果が発表されるのである。本県の水母を世界の研究者達に直接知ってもらう絶好のチャンスである。不慣れな英語による講演に全力を尽した。意外にも国内をはじめ、米・英・加・独の専門家達から拍手を受け、『オオ！ベリーインタレストング!!』と次々に賞め言葉を載いた。研究にも国境がないことを、この時程痛感したこととはなかった。

## 子供に励まされる

その後、会議の座長を務められた海産無脊椎動物学の世界的権威者である京大理学部瀬戸臨海実験所長の時岡 隆教授から若狭湾の水母の研究成果を博士論文にまとめてはどうかと勧められた。非才な私には無理かとは思ったが、今一度努力をと決意した。ある大学の先輩から、学位論文の執筆は、普通の小論文の困難さの二乗に比例すると聞かされていたが、実際に書き始めてみると正にその通り、これ又大変な忍耐と努力が必要であった。しかも、帰宅後の限られた時間内でそれを強行しなければならなかった。論文が半ばに達した頃、私の良き理解者であり、絶えず励ましてくれた父（元帯広市科学館初代館長）が突然他界し、そのショックは痛烈であった。

そのうえ、本州の夏の厳しさが、睡眠不足の体に一層重くのしかかり、日増しに体力・精神力が衰えていくのを感じた。もうこれ以上は無理とペンを持つ気力を失いかけたある夜、ふと当時小学校一年の長女の机に目をやると、『私のお父さん』と題する2～3枚の作文に気付いた。



京大瀬戸臨海実験場で行なわれた第2回腔腸動物国際会議で筆者の研究を特に評価してくれたイギリスのアレイン・ロブソン博士(左)とカナダのアライ・メリー博士(中央)のお2人と共に。腔腸動物研究者に特に女性が多いのは、泳ぐクラゲの美しい姿にひかれるためといふ。

『私のお父さんは、毎日毎日夜遅くまで勉強しています。お母さんに聞いたら、水母の研究をしているのですよと言いました。とてもシンドそうですが、私はお父さんの仕事がうまくいって欲しいと思います。』と言った内容であった。私は胸が熱くなるのを覚えた。何も判らぬはずの8才の子供が、彼女なりに心から支援してくれているのを知った時、この子の夢をこわさぬ為にも頑張らなければと挫折しかけた心身に鞭うって、再び研究に専念した。

### 学位を授与されて

こうした経緯があって51年3月、約350頁の論文がようやくして完成した。この論文に目を通された時岡教授は、母校の先生方に次のような推せん状を送って下さったのである。『水母の野外生態研究としては我が国で比較するものがなく、多分以後の野外研究の基礎となるものであろう。並々ならぬ努力の集積によって得た知見は、漁業・臨海工業面にも応用可能であり、かつ分類学の面にまで影響を及ぼすことになる。正直いって脱帽して敬意を表するに足る努力の結晶であると結論したい。』と。この書状を何度も読み返すうちに、涙が自然に頬を伝った。審査の結果、満場一致で授与可と議決された。小雪のちらつく札幌の北海道大学で同学長から、嬉しいと激励の言葉と共に手渡された学位記をしっかりと両手に握りしめた時、子供のオムツを洗いながら読んだ文献、人目を忍んでした実験、睡眠不足と過労による船上での転倒、半年以上もなおらなかつた風邪との闘い、視力の急激な低下等の中で、一歩一歩自然の水母を浮き彫りにしてきたことが、回り燈籠のように浮かんでは消えた。

私にとって永い永い苦難と試練の十年間でもあった。しかし、この栄誉は、私の研究を理解し、9才と5才の子供達の育児のかたわら、実験の補助や資料の整理等に永い間、苦労を共にして来た妻の協力や子供達の忍耐があってこそ得られたものであり、感謝の気持で一杯である。終りに、この感激を忘れることなく、一層の努力を続けると共に、たとえ僅かな時間ではあっても、一家団らんの場を持つ様に心掛けることが、私の出来る家族へのせめてもの罪滅ぼしあろうと考えている。

(福井県水産試験場研究員水産学博士)